＊＊＊＊＊＊＊＊　頌春　２０１０年　寅年＊＊＊＊＊＊＊＊

あけましておめでとうございます。(書き終わる前に年が明けてしまいました。)　2009 年のご報告と新年のご挨拶をお送りします。「なかま」の改訂作業は「なかま２」に入り、本当は 2009 年の九月に出す予定でしたが、一年遅れて、2010 年の新学期に間に合わせるべく作業中です。

由紀子は広島大学での仕事が３年目に入り、日本の生活にも慣れてきたようです。今年は同僚との共同研究と自分自身の科研費がおりたおかげで、今までより余裕をもって研究が出来るようになりました。夏にはデータ収集を行い、今は書き起こし作業やコーディングに終われています。２月から別の本のプロジェクトに取りかかることになっており、仕事は相変わらず山積している状態です。その他、広大で実習担当をしているので、2009 年は６月以降、新型インフルエンザと学級閉鎖の危機に振り回された年でもありました。

私生活では５月に国内外の女友達５人で那須温泉へ行きました。９月には瞼の手術を受け、今まで狭かった視界が人並みに広がりました。(過去 50 年自分の視界が並外れて狭いことに気がついていなかったことも問題ですが。）術後はコンタクトレンズが使えなくなったので、眼鏡がお友達になりました。１０月には慶応大学でのゼミの恩師倉沢先生が急逝され、お葬式のお手伝いに行きましたが、そこで大学卒業以来３０年も会っていなかった多くの旧友に会うことになりました。倉沢先生が引き合わせて下さったことがきっかけとなって、同期の皆さんの所在が分かり、今後はおりを見つけて，同期で会おうという話もできるようになりました。

一味はパデュー大学での仕事に加え、３月にいつもミドルベリー来ていただいている柳家さん喬・柳亭左龍の両師匠をシカゴにお迎えして、シカゴ寄席を開催しました。そして、五月に少し日本に戻り、６月からはミドルベリーに入り、校長として５回目の夏学校を運営しました。落語ウィークはすっかり定着し、常連の三師匠（さん喬・二楽・左龍）が１週間、学生達と過ごしてくださいました。被爆者の方をおよびする活動も継続できています。日本語学校が大きくなり、学生数が 100 名、教員が 27 名という大所帯となりましたが、何とか大きな問題なく切り抜けました。秋学期と春学期はパデューからは休みをもらい、十月から翌年の四月までお茶の水女子大の客員研究員として東京暮らしをしています。お茶大での活動は、留学生に小噺をさせるというミドルベリーでの活動の延長で、十二月にお茶の水女子大の大学講堂で落語会を開催し、留学生、お茶大関係者、日本語教育関係者、そして寄席ファンと合わせて 300 名ほどお客様がいらっしゃいました。５年前に始めた落語との縁がこのように発展するとは想像していませんでした。それから、母校の早稲田大学の大学院でも非常勤講師として講義をひとつ持っています。久しぶりの東京での生活は、楽しいのですが、いろいろ壁にあたることもあり、自分が「文化ホームレス」になっていることを改めて思い知らされています。十二月には台湾の元智大学で教えている教え子の中澤助教授

の招待で初めて台湾に行きました。元智大と政治大で行った講演を無事終えた後、中澤夫妻の案内で普通の観光客では体験できない台湾をしっかり体験させてもらいました。(中澤夫妻、多謝)思い出に残っている台湾は、台北 101，故宮博物館（圧巻は象牙の細密な細工物)、夜市、小籠包、臭豆腐、ミルクの唐揚げ、ウズラの卵の串揚げ、愛玉、鴨の血のババロアのような食感のもの（見た目はレバー)、客家料理、火鍋、茶藝（高山茶を飲みました)、足の裏マッサージ、そして、ベイのお父さんです。(ベイは中澤夫人です。）火鍋の威力は恐ろしいです。想定外に辛かったのはもちろんですが、鍋を食べている間中、首から上は汗をかきっ放しで、終わった時にはシャワーから出てきた様でした。食事をして、満腹感ではなく疲労感を味わったのは初めてのことでした。しかし、火鍋はその後も、24 時間、ガメラの火球のように私の体の中をゆっくり動き、体を出て行くその瞬間まで、存在感を主張し続けました。今年は四月にアメリカに戻って、ミドルベリーから仕事が始まります。

一味がアメリカを長期離れるため、チビタンとミータローはミシガンの友人の久保田さんのところで里犬、里猫として過ごしています。「手に負えないので、返す」という連絡はないので、うまくやっていることと思います。

それでは、みなさん、今年もよろしくお願いいたします。

一味　&　由紀子

＊＊＊＊＊＊＊＊　頌春　２０１０年　寅年＊＊＊＊＊＊＊＊